

行列のできないラーメン屋

庭鳥

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

そこはどこかのラーメン屋。知る人ぞ知る店。今日もそこでは麺をすする音が聞こえる。

一発ネタです。おつまみ程度にご覧ください。

飯テロ要素はないです。

目次

行列のできないラーメン屋

1

## 行列のできないラーメン屋

麺をゆで始めてから早三十分。そろそろ頃合いであろう。

麺をあのザルみたいなやつで掬い上げ、特製スープの中にぶち込む。

その瞬間、熱された油が顔面に飛び跳ねるが、そのゴリラのような顔の男は眉一つ動かさない。

ちゆるちゆると顔に似合わず可愛くラーメンを啜った男は、満足そうに言葉を漏らした。

「うん、不味い」

ラーメン屋に似つかわしくない光景、しかしそこはラーメン屋である。

しかも行列のできないことで有名なラーメン屋である。

つまり客なんてほとんどいないのだ。

店主の癖に、このゴリラがラーメンをすすっているのがいい証拠だろう。

夜道に屋台を構え、何も知らない無垢なるトーション口を捕まえるのが今日の彼の仕事なのだ。

ザツザツと一人のやつれた男がこの屋台に近づき始めた。

ああ、この男は人間が元来持つ生存本能を失ってしまったのだろうか？

蜘蛛の巣、いやゴリラの巣に一匹の哀れな虫が囚われてしまった。

「親父……。ラーメン一つ。」

どうやらやつれた男は、ラーメン屋の店主がラーメンを貪っているという異常事態に気づけぬほど

疲労しているようだ。

ここで素直にラーメンを作るような店だったらもう少し客がいただろう！

しかし、ゴリラは閃いたといわんばかりにラーメンを食いながら話し出す。汚い。

「・・・あんだ。どうやらすごく疲れているようだが、何かあったのか？話してみんさい。」

ゴリラは諭すように話し始めた。

しかし騙されてはいけない!!

こいつはラーメンを作るのが面倒だから時間を稼ごうとしているだけなのだ!!

その証拠にこいつ一切ラーメンを食うのを止めない!!

しかし、男は気にする余裕がないようで、ぽつりぽつりと話し出す。

「・・・ええ。私の仕事、最近余裕がなくなってるね。これを食べたらまたすぐに

会社に行かないやなんじゃないんですよ。」

男は愚痴を聞いてもらいたかったのか、結構饒舌であった。

ゴリラはこれ幸いと会話を続ける。

「そいつは大変ですね。しかし、そんな大変な仕事とは何をやってるんです?」

「インスタントラーメンに加薬を入れる仕事をしています。」

男は、結構誇りに思っています。と小さくはにかみながら続けた。

ゴリラは加薬を知らないらしく、(・・・火薬?)と勘違いしていた。

目の前の男をテロリストだと思ったゴリラは、急にキレた。

「そんな仕事!!やめてしまえばいいんですよ!!!」

夜の街にゴリラの声が響く。

目の前の男はハツとしたようにゴリラを見た。

そりやそうだ。いきなりそんなこと言われれば。

「・・・そうか。こんなに疲れるなら辞めてしまうのもいいか!!といかななぜ我々は手作業で入れているんだ!!機械でやればいいじゃないか!!」

しかし、男は疲れ切っていた。疲労が蓄積しすぎていたのだ。

男はゴリラの力強い色黒の手を取り、感激したように話し出す。

「ありがとうございます!!店主さん!!今すぐ会社に戻ってこのことを

話し合わなくては!!

申し訳ありませんが、行かせていただきます!!代金いくらですか!?”

「あ、ラーメン一杯7百万円です。」

足音が夜の街に消えると、そこは元通り行列のできないラーメン屋だった。

結局疲れた男は、時そばもびつくりの支払いに気づかなかった。

いや多分、元から頭が弱いのか・・・?

しかしゴリラは急に7百万円もの大金を手に入れて満足だった。

いやはや、これで何をしてやろうか。

やはりまずは・・・女だな!

ゴリラの世界に貨幣制度があるとは思えないが、なぜか満足げに笑っていた。

その後、ゴリラは逃げ出した動物園に捕獲され、人語を解するゴリラとして人気者になっていた。

しかし、ゴリラは今夜も動物園を後にする。

行列のできないラーメン屋。どこにでも現れるラーメン屋。

貴方の町にも、きっとゴリラは現れる。